企業の現場調査

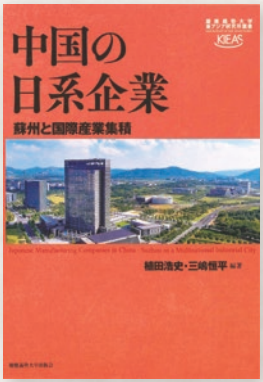
経済学部　教授　田中幹大（たなかみきひろ）

私は研究の一環で企業訪問調査をよく行う。特に中小企業、なかでも製造業を研究対象としているので、東大阪のような中小企業が集積している地域に足繁く通ってきた。調査は国外も含めて実施しており、経済学部の植田浩史教授、三嶋恒平准教授と共同研究して発表した『中国の日系企業―蘇州と国際産業集積』は、中国江蘇省蘇州市を対象に２００５年から２０１９年までに日系企業、外資系企業、中国ローカル企業、政府機関等あわせて２４８カ所を調査した成果である。私が企業調査を始めたのは２０００年代初め頃からであるから、国内調査も含めると相当数の調査を行ってきたのではないかと思う。

ゼミでも学生に企業調査の重要性を説いて現場に赴くように促している。コロナ禍で企業に行くことができないときでもＺｏｏｍで実施してきた。もちろん生産現場を直接みることはできないので製造工程の流れや工夫などを観察することはできないが、現場の人の話を聞くことは大事にしてきた。最近は再び学生たちと実際に工場に調査へ出かけるようになっている。

企業に行って調査することの目的の一つは文献や資料などでは知られていない情報、事実を発見することである。何が新しい情報、事実かを判別するためには何が知られている情報、事実なのかを知っていなければならない。したがって、学生には調査目的に沿った事前の下調べ、場合によっては予備調査がいかに重要かを話してきた。ただ企業の現場に行けばよいということではない。

しかし、調査ということと一見矛盾するようであるが、完璧な調査は調査に行く必要がない。私は中国での調査や国内調査でたびたびそうした調査を遂行してきた。つまり、調査のために対象とそれに関わる情報を予備調査も含めて入念に調べあげれば、調査に行ったときに発見できる情報、事実が予見できるからである。もちろん調査の目的や性格によって異なるが、調査は調査に行く前に終わっていることが望ましい。完璧な調査は調査に行く必要がない。こう言うと学生からは怪訝な顔を向けられる。



教員によるエッセイコーナー
談話室